

はじめに

本書は平安朝漢文学史に関わる問題について考察した既発表の論文をまとめたものである。大きく三つに分けたが、Iには、広くいくつかの時代に亘るもの、あるいは、一時代の特質と考えられる問題を論じたものを置いた。IIには、いくつかの時代に及ぶものもあるが、個別の問題に限ったもの、また、一作品を対象とした論をまとめた。IIIは17「尚齒会の系譜」の旧稿に付していた副題、「漢詩から和歌へ」で括ることのできる諸論である。

このように三つに分けたが、括りを越えて相関わるものもともとよりある。「漢詩から和歌へ」ということは、Iの2「勅撰三集の唱和詩と述懐詩」、5「文徳朝以前と以後」、6「古今集時代の詩と歌」も該当する。5、6はもともと旧稿の掲載誌が『古今集』および和歌の特集号であったことから、漢詩から和歌へ、あるいは両者の関連ということ論じることを意図して執筆したものである。またIも古今集歌に論及している。このように和歌との関連のもとに詩文を論じたものがある程度を占めている。

Iで全体的に述べたことの個別の論をIIに置いたものがある。

嵯峨朝における特徴的な詩作の方法として「君臣唱和」ということが言われている。その具体的な作例は応製奉和詩であるが、本当にこの時代を特徴づけるものは奉和詩である。そのことをIの3「勅

撰三集詩人の身分と文学」で述べているが、Ⅱの1「嵯峨天皇と惟良春道」はその典型として、嵯峨天皇と社会的身分においては対極にある卑位の一官人との詩作を通しての交渉のさまを読み取るうとした。仁明朝承和期を画期、転換期と捉えることは文学研究ばかりではなく、歴史学においても、すでに共通の認識となっている。Ⅰの4「承和への憧憬——文化史上の仁明朝の位置」はその画期としての承和期を論じたものであるが、Ⅱの8「平安朝の楽府と菅原道真の〈新楽府〉」で明らかにした、勅撰三集における楽府の存在と承和以後における断絶ということは、これに付け加えてよい一事例である。また、10「詩の注記と『菅家文章』の編纂」で論じた、詠詩に自注を付すという詩作の方法も、やや時間の幅を拡げて考えると、これに加えることができよう。勅撰三集の詩にあつては全く用いられていなかった方法が、白居易の詩に学んで（その我が国への伝来は承和期である）、承和期の詩には見られないもの、しばらく時間を置いて、菅原道真にやや先立つ詩人たちから用いられるようになるということである。

文学史的視点からする考察においては、ある事象に関して、時間の流れのなかで観察し、その消長の様相を読み取る、あるいは、どこかに転換点が見いだせるか否かを見極めるなどは主要な論題である。前述の、4「承和への憧憬」、そして8「平安朝の楽府と菅原道真の〈新楽府〉」、10「詩の注記と『菅家文章』の編纂」はそうした論であるが、巻頭においた「平安朝漢文学史の輪郭——詩序を例として」もまた、同じ観点に基づくものである。この論では、その物差しとして文体というものをを用いた。

Ⅱの10「詩の注記と『菅家文章』の編纂」は、論の主題は『菅家文章』に特徴的な詩に自注を付すという方法は白居易の詩に学んだものであることを述べようとするものである。また9「菅家文章」の成立」における、詩集の枠組み、分類・配列の方法に視点を据えたのも同様であるが、こうした形式

的な側面において問題を考えようとしたのは、意図してのことである。白居易に限らないが、中国文学の作品・詩人の受容、影響を見るということになる、その発想や表現ということを考えるのが標準的な方法であるので、その常套から脱してみたくて、あえて視点をずらした。『白氏文集』という詩文集が、しかも我が国にはその古態を保つテキストが残る白居易については、それが可能と考えたからである。個別の論については批評を待つのみである。

二〇二二年三月

後藤昭雄

目次

はじめに……………(1)

I

1 平安朝漢文学史の輪郭——詩序を例として……………3

2 勅撰三集の唱和詩と述懐詩……………17

3 勅撰三集詩人の身分と文学……………33

4 承和への憧憬——文化史上の仁明朝の位置……………57

5 文徳朝以前と以後……………74

6 古今集時代の詩と歌……………101

II

7 嵯峨天皇と惟良春道……………129

8 平安朝の樂府と菅原道真の〈新樂府〉……………149

9 『菅家文章』の成立……………178

10	詩の注記と『菅家文章』の編纂……………	186
11	平安朝における『文選』の受容——中期を中心に……………	207
12	延久三年「勸学会記」をめぐって——文事としての勸学会……………	237
13	大江匡房「詩境記」考……………	265

III

14	坤元録屏風詩をめぐって……………	293
15	和歌真名序考……………	313
16	『基俊集』の贈答詩歌……………	334
17	尚齒会の系譜……………	350
18	嘉保の和歌尚齒会……………	369
19	白河尚齒会記……………	394
20	賦光源氏物語詩序……………	416

人名索引……………	左1
書名索引……………	左6
事項索引……………	左11

凡例

一、引用史料中の（へ）で括った部分は、原文では双行注であることを示す。

二、論述中の文献のうち、左記のものはそれぞれ次のテキストの作品番号（条番号）を用いた。

凌雲集

小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（中）（塙書房、一九七九年）

文華秀麗集

小島憲之、日本古典文学大系『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（岩波書店、一九六四年）

経国集

小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（下）Ⅱ・下Ⅰ・下Ⅱ・下Ⅲ（塙書房、一九八六・九一・九四・九七年）

菅家文章

川口久雄、日本古典文学大系『菅家文章 菅家後集』（岩波書店、一九六六年）

和漢朗詠集

菅野禮行、新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』（小学館、一九九九年）

本朝文粹

大曾根章介・金原理・後藤昭雄、新日本古典文学大系『本朝文粹』（岩波書店、一九九二年）

江談抄

後藤昭雄・池上洵一・山根對助、新日本古典文学大系『江談抄 中外抄 富家語』（岩波書店、一九九七年）